

新興国レポート

インドルピーが対米ドルで7月下旬以来の安値に

対円ではボックス圏での推移

- ▶ 10月5日のインドルピーは対米ドルで7月下旬以来の安値に下落。
- ▶ 資源価格の高騰によるインド経済の悪化懸念や米10年国債金利の上昇等が要因に。
- ▶ 今後の米10年国債金利の動向等によっては、インドルピーは対ドルで下落基調をたどる可能性も。但し、円も対米ドルで下落するものと思われ、対円ではボックス圏での動きとなろう。

(1) インドルピーが約2ヵ月ぶりの安値に

- インドルピーが8月末頃を境に対米ドルで下落基調となっています。10月5日の外国為替市場で、インドルピーは一時1米ドル=74.45インドルピーと、7月下旬以来の安値を付けました。その背景には資源価格の高騰や米長期金利の急騰があるものと思われ。尚、円も対米ドルで下落しています。9月29日には一時1米ドル=111.96円と、2020年2月以来の安値を記録しました。円下落を受け、インドルピーは対円ではボックス圏で推移しています(図表1)。
- 世界経済のコロナ禍からの回復で需要が高まる一方、生産国での自然災害等による生産や物流の停滞を背景に供給不足が深刻化し、資源価格が高騰しています。WTI原油先物価格は8月下旬から騰勢を強め、OPEC(石油輸出国機構)にロシア等を加えたOPECプラスの閣僚会議が11月の生産量について追加増産の見送りを決定した10月4日には約7年ぶりの高値に上昇しました。脱炭素で化石燃料への投資が滞る中、エネルギー需要の回復から石炭価格も上昇ペースを速めています(図表2)。石油等の高騰を受け、インドでは電力不足への懸念が強まりつつあるようです。企業の生産活動の停滞で景気が悪化するとの見方がインドルピー安に影響を与えているものと思われ。
- FRB(米連邦準備制度理事会)が9月22日にテーパリング(量的緩和縮小)の年内着手と2022年中の利上げ開始を示唆したこと等を背景に、米10年国債金利は上昇基調に転じました(図表3)。インド10年国債金利との金利差(インド10年国債金利-米10年国債金利)縮小で資金が米ドルに回帰するとの見方もインドルピー下落の要因になっているものと考えます。

(2) インドルピーの当面の動向

- 資源価格の動向や米国の物価統計等によっては米10年国債金利の上昇傾向が続き、インドルピーが対米ドルで下落基調をたどることも予想されます。一方、対米ドルで円も下落するものと思われ、対円ではボックス圏での推移になるものと考えています。

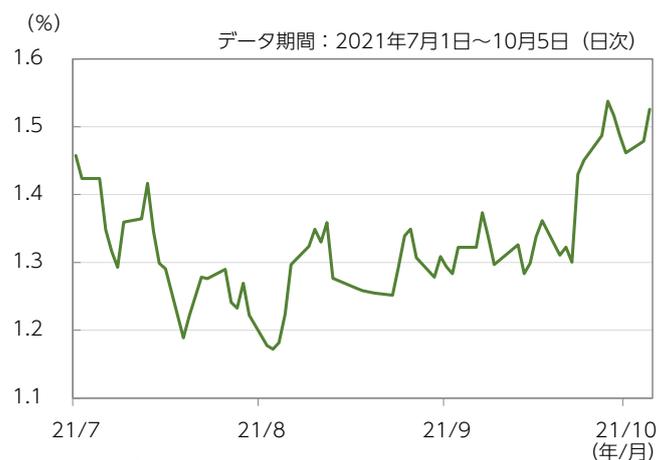
図表1：インドルピーの推移



図表2：原油及び石炭先物価格の推移



図表3：米国10年国債金利の推移



出所) 図表1~3はブルームバーグのデータをもとに
ニッセイアセットマネジメントが作成

【当資料に関する留意点】

- 当資料は、市場環境に関する情報の提供を目的として、ニッセイアセットマネジメントが作成したものであり、特定の有価証券等の勧誘を目的とするものではありません。また、金融商品取引法に基づく開示資料ではありません。実際の投資等に係る最終的な決定はご自身で判断してください。
- 当資料は、信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。
- 当資料の内容は作成時点のものであり、将来予告なく変更されることがあります。
- 当資料のいかなる内容も将来の市場環境等を保証するものではありません。
- 当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。
- 当資料に投資信託のグラフ・数値等が記載される場合、それらはあくまでも過去の実績またはシミュレーションであり、将来の投資収益を示唆あるいは保証するものではありません。また税金・手数料等を考慮しておりませんので、実質的な投資成果を示すものではありません。
- 投資信託は投資する有価証券の価格の変動等により損失を生じるおそれがあります。
- 投資信託の手数料や報酬等の種類ごとの金額及びその合計額については、具体的な商品を勧誘するものではないので、表示することができません。

<設定・運用>



ニッセイアセットマネジメント株式会社

商号等：ニッセイアセットマネジメント株式会社

金融商品取引業者

関東財務局長（金商）第369号

加入協会：一般社団法人投資信託協会

一般社団法人日本投資顧問業協会

ニッセイアセットマネジメント株式会社

コールセンター 0120-762-506（受付時間：営業日の午前9時～午後5時）

ホームページ <https://www.nam.co.jp/>